

〈論文〉

スペイン統治期ラプラタ地域の
イエズス会布教区における先住民社会組織

—パルシアリダと軍事組織を中心に—

武田和久

はじめに

スペイン統治期ラプラタ地域には、スペイン語でミシオン (misión) またはレドゥクシオン (reducción) と呼ばれるイエズス会管轄下の布教区が存在した。布教区には、先スペイン期より周辺地域で暮らす先住民グアラニ¹⁾が集められ、そのキリスト教化が推進された。すべての布教区は、パラグアイ管区²⁾の最高責任者である管区長の指示に従って、ほぼ同一の原理にもとづいて建設され、広場を中心に、聖堂、学校、墓地、先住民住居などが整然と設けられた。布教区は1609年の発足以来、移転や統合を繰り返し、1720年代の最盛期には総数30に達し、全人口は14万人を超えた。しかし1767年から68年にかけて、国王カルロス3世の命により、スペイン領全域からイエズス会士が追放されると、布教区は徐々に衰退していった。19世紀初頭の独立戦争がこれに拍車をかけ、同世紀中葉以降には廃墟と化した。

布教区運営の際、イエズス会士は、内部に複数の社会組織を設け、一部のグアラニを役職に据えた。社会組織の内訳とは、エリート先住民が属した政治組織カビルド (cabildo)、スペイン領の防衛を担った軍事組織 (milicia)、各種年中行事を執り行った宗教組織コングレガシオン (congregación)、そして本稿の議論の中核をなす親族集団パルシアリダ (parcialidad)

などである。これら社会組織に関する研究は、20世紀初頭のパブロ・エルナンデスを発端とする。

エルナンデスは、1913年出版の全2巻の大著の中で布教区の歴史を通時的に論じ、社会組織については次のように言及した。カビルドについては、様々な役職の存在、役員選出の手順、役職者の職務内容の概要、役員に付与された諸特権などを論じた。軍事組織については、軍事役職の存在、布教区への銃器配備の歴史的経緯、軍事訓練のやり方などを考察した。他方コングレガシオンについては短く触れられ、布教区ごとに存在した大天使聖ミカエル信徒会および聖マリア信徒会の内部構成、各種役職の存在、職務内容を紹介した。パルシアリダについてはコングレガシオン以上に簡単に扱われ、「先住民首長がパルシアリダを統率し、これが布教区の基本的な構成要素になっていた」と述べた。しかし、その内実は全く論じられていない (Hernández 1913)。

それからおよそ50年後の1962年、ギジェルモ・フルロングは、約800ページにわたる大著を著し、布教区の歴史を仔細に論じた。そして社会組織に関しては次の諸点を明らかにした。カビルドについては、役員選出の際に実施された選挙の様子を詳しく描写し、また「小カビルド」を意味するカビルド・ミリ (cabildo miri) と呼ばれる組織が一部の布教区に存在し、幼年のグアラニが役員を務めていたことを指摘した。軍事組織については、軍事技能や知識に長けたイエズス会士の名前を挙げ、軍事専門の役職に就いて先住民軍事組織の編制に携わる彼らの様子を記述した。コングレガシオンについては、未刊行の年報³⁾ (Carta Anua) をもとに、各布教区の全人口に占める信徒会メンバーの割合や、宗教儀礼に臨む彼らの姿が細かく描写され、エルナンデスの研究よりも明らかな進展がみられた。しかしパルシアリダについては、それが統率者である先住民首長から息子へと受け継がれるものであること、また一つの布教区には平均して50のパルシアリダが存在したと記すにとどまり、その内実は依然としてわからない (Furlong 1962)。

今日、ラプラタ地域のイエズス会布教区の研究に携わる者の多くは、エルナンデスとフルロングの研究から多大な恩恵を受けている。しかし社会組織に関して言えば、大方が二人の研究を無批判に受け入れているという観は否めない。例えば1970年代から90年代にかけては、後に布教区研究の必読書とされる著作の刊行が相次いだ⁴⁾。しかしいずれの著作においても、社会組織に関する記述は、エルナンデスやフルロングの引き写しにとどまっている。このため記述の内容は、著者は違えども、概ね似通っている。

社会組織に関する最近の研究動向としては、個々の組織内に設けられた役職の内容や、役職者の実際の行動を扱ったものが多い。例えばカビルドについては、サンドラ・ディアス・デ・サピアが各種役職の職務内容の詳細を論じた (Díaz de Zappia 2003)。またバーバラ・ガンソンは、主にイエズス会士追放後の史料をもとに、スペイン植民地政策に対してカビルド役員が異議を唱える政治的プロセスを明らかにした (Ganson 2003)。しかしカビルド役員の出自や、個々の役員がどのような支持母体を受けて選出されたのかなど、同政治組織を取り巻く人的環境は依然として明らかではない。

軍事組織に関しては、その設立経緯や活用のされ方が80年代以降に解明された。アルノ・ケルンは、スペインからの命令文書やイエズス会士の手記をもとに、布教区が防衛拠点として位置づけられ、これがスペインにより地政学的に重視されるに至った過程を明らかにした (Kern 1982)。またメルセデス・アベジャネーダは、軍事組織に属するグアラニが、スペイン国王やラプラタ地域のスペイン人総督の命令を受けて、様々な軍務に関わっていたことを論じた (Avellaneda 2005; Avellaneda y Quarleri 2007)。しかし両者とも、個々の軍事役職の上下関係や、兵員の徴兵手順など、組織の内部構造については何も語っていない。

宗教組織コングレガシオンについては、カビルドと軍事組織以上に未解明な点が多い。1971年にオディロン・ジャエゲルがコングレガシオンに特化した論考を出したものの (Jaeger 1971)、その内容には、前述のエルナ

ンデスとフルロングの著作と比べて大差がない。

親族集団パルシアリダについては、近年の研究ではないが、ブランストラバ・ススニックが1966年に公にした著作が参考になる。同書はラプラタ地域からイエズス会士が追放された1767年以降、総数30の中でもとりわけ13の布教区に関して、グアラニに生じた社会・文化的な変容を解明するものである。本稿の議論との関連においては、特定の布教区を対象に実施された人口調査結果をもとに、パルシアリダの数や各々の内部構成の推移を時代ごとに数値化した点は重要である⁵⁾ (Susnik 1966)。しかしながら、データの提示の仕方が一貫性に欠けている点は否めない。例えば、ある布教区内でパルシアリダを率いる先住民の氏名を細かく列挙する一方で、別の布教区に関しては、先住民統率者の総数のみを提示するといった具合である。また個々のパルシアリダの構成人数の増減を促した要因に関する考察や、パルシアリダの機能についても特に際立った言及はない。

なお本稿に関連する邦語文献の先行研究に関しては、管見の限り齋藤晃が、現ボリビア北東部モホス地方のイエズス会布教区を事例として、パルシアリダの研究の重要性を指摘している。齋藤は、パルシアリダと他の社会組織との関連を明らかにするなど、布教区内の多民族性に主眼をおいた新たな研究領域開拓の可能性を提起している (齋藤1997; 2009)。

ところで、先行研究における社会組織関連の記述内容は、どうして似通っているのか。おそらくその理由の一端は、これまで多くの研究者が叙述形式のクロニカ (crónica) にのみ依拠してきたためと考えられる。確かにクロニカには、布教区の詳細に触れるものもあるが、社会組織に関しては概論的記述が多く、ほぼ同じ内容に終始している。つまり本稿で考察の対象とする社会組織を論じるには、クロニカに加えて別種の史料が必要なのである。

クロニカの内容を補完できる史料として筆者が目にしたのは、2008年8月ブエノスアイレスの国立総文書館 (Archivo General de la Nación [AGN]) で見つけた住民名簿と徴兵簿である。前者はパラグアイ総督⁶⁾が

1715年に実施した布教区の人口調査の過程で作成されたものであり、布教区在住のすべての首長とその配下の先住民の氏名が、パルシアリダごとに列挙されている。後者に関しては執筆目的は不明であり、また執筆年代も18世紀後半頃としか推定できない。しかし先住民軍事役職者ならびに一般兵士の氏名が連なっており、一部隊の内部構成を示す貴重な史料である。またブエノスアイレスのミトレ博物館 (Museo Mitre [MM]) を2004年9月に訪問した際には、1761年に作成された先住民徴兵簿も見つけていた。筆者が知る限り、先行研究でAGNの住民名簿ならびに徴兵簿が主たる分析の対象として取り上げられたことはない。またMMの徴兵簿に関しては、ラファエル・カルボネルが布教区の経済システムを論じた大著の中でかつて引用したものの (Carbonell 1992: 463)、中身の詳細な分析までには至らなかった。

本稿では、おもにこれらの住民名簿と徴兵名簿の分析にもとづいて、パルシアリダと軍事組織の形態と機能を解明する。この作業は基礎的なものだが、従来の研究では、一布教区内のパルシアリダの数やその構成人数、軍事組織の部隊編成や兵員数などの具体的詳細が提示されることはほとんどなかった。本稿ではさらに、パルシアリダと軍事組織の関係の通時的変化について仮説的再構成を試みる。結論を先取りして言えば、17世紀前半まではパルシアリダの応用であった軍事組織は、同世紀中葉から後半にかけて、軍事機能に特化した専門的な組織として自立したと考えられる。本稿ではこのプロセスを「軍事組織の専門化」と呼ぶことにする。なおカビルドとコングレガシオンに関しては、本稿執筆時点でその実態の解明に役立つ史料を入手できていないため、今後の課題としたい。

本稿の構成は次の通りである。Iでは、イエズス会士によりカシーケ (cacique) と呼ばれたグアラニの在来の首長の布教区内部での位置づけ、また彼が率いたパルシアリダの内実を論じる。まず、カシーケは社会生活の基本単位であるパルシアリダを動かすのに不可欠な存在だったことを示し、次いでパルシアリダの構成人数、規模、機能を明らかにする。次のIIでは、

17世紀前半まではパルシアリダの応用として機能していた軍事組織が、軍事という特定の目的に沿って徐々に専門化されていったことを指摘する。またこれを促した要因として、スペイン帝国内部におけるイエズス布教区の位置づけや、グアラニが携わる軍務の頻発・大規模化が関与していた可能性を示唆する。最後に、イエズス会布教区の軍事組織の専門化は、スペイン領アメリカ全域、またスペインやオランダなどヨーロッパ諸国の軍事・軍制システムを踏まえて、包括的に議論されねばならないことを提示する。

I 布教区内におけるカシーケとパルシアリダ

1 日常生活におけるカシーケの重要性

まず、布教区内でカシーケと呼ばれたグアラニの在来の首長の位置づけを論じたい。イエズス会士が残した記録にもとづけば、カシーケは、布教区に入る前と入った後、いずれにおいても、複数の家族からなる集合家屋の統率者であった。このことは、布教区に入る前のグアラニの一般的な居住形態について匿名のイエズス会士が1620年12月に記した記述、また1626-27年度年報におけるコンセプション布教区の先住民住居に関する記述を相互参照して明らかになった。いずれの記録にも、(1)一人のカシーケが複数の家族を従えて家屋を形成していたこと、(2)家屋の内部には一切の仕切りがなく、天井を支える柱が数本立つにすぎなかったこと、(3)柱と柱の間が一家族の居住スペースに相当した、という共通点がある⁷⁾。つまり布教区内では、一人の首長が複数の家族を従えて一住居を形成するという在来の仕組みが、少なくとも1620年代まで、そのまま維持されていたに違いない⁸⁾。

今日人類学者たちの説に従えば、イエズス会士が布教区の運営にあたり活用したグアラニの社会組織は、テイイ (teii) に相当すると考えられる。テイイとは、マローカ (maloca) と呼ばれる一つの家屋を基本に構成される拡大家族であり、テイイル (teii-ru) と呼ばれる世襲制家長が、一定数の人々を率いて一つのテイイを構成していた。テイイルの配下の人数は様々

だが、最大でも200人程度だったと言われる (Necker 1990: 27; Roulet 1992: 166)。おそらく、イエズス会士との接触前にテイイルを務めた人物が、布教区内でカシーケと呼ばれ、後述する個々のパルシアリダの統率者として、従来同様に権力を維持したのだろう。イエズス会士たちは、ラプラタ地域で布教活動をはじめた間もない頃、人類学者たちがテイイと呼ぶ組織を、ほぼそのままの形態で布教区に導入していたのである。つまり発足間もない布教区は、テイイの集合体だったのである⁹⁾。

布教区においてカシーケは、住居の形成のみならず、日常生活で諸作業を実施するにあたって重要な役割を果たしていた。後述するカシーケの特権をラプラタ地域のスペイン人総督に公的に認めてもらうべく、イエズス会士たちが1650年代に作成した一連の文書があるが、この中に、ある布教区担当のペドロ・モラが1658年3月15日付で記した記述がある。彼が一定数のグアラニを公益の作業 (*obra pública*) に従事させようとしたところ、思うように動いてくれない。そこで布教区内のインディオ・プリンシパル (*indio principal*) がモラに助言し、カシーケを通じて同じ作業を頼んだ。するとグアラニたちは、快く応じてくれたという¹⁰⁾。

カシーケを通じてグアラニを特定の作業に従事させるこの種の試みは、17世紀中葉だけに限ったことではない。同世紀後半から18世紀にかけて、メモリアルと呼ばれる命令文書が、管区長から布教区に定期的に出されるようになるが、この中の一つでは、日常生活の過程でグアラニを諸作業に就かせるための方策が指示されている。例えば1714年6月28日付でサン・ミゲール布教区に下された命令には、普段は畑仕事にあてているグアラニを、カシーケの指揮のもとで家屋の改築に従事させよとある¹¹⁾。また同年7月1日付でサン・ロレンソ布教区に出された命令には、畑仕事の際にはカシーケに配下の人々 (*vasallo*) を指揮させよとある。こうすることが時間や作業の効率化につながるという¹²⁾。つまり17・18世紀を通じて、カシーケの権威は、畑仕事や建物の建設など、多くの人手が必要な作業に活用されていたのである。

表1 カシーケの数の推移

布教区の名称	1657年	1715年
サン・カルロス	24	記載なし
サン・ニコラス	33	記載なし
アポストレス	30	記載なし
コンセプション	42	記載なし
サン・ミゲール	17	記載なし
マルティレス	15	記載なし
サンタ・マリア・ラ・マジョール	37	記載なし
サン・フランシスコ	25	記載なし
サント・トメ	37	記載なし
アスンシオン・デ・ヌエストラ・セニョーラ・デル・ムボロレ	18	記載なし
ジャベジュ	34	記載なし
イタブア	55	記載なし
カンデラリア	20	27
サン・コスメ・イ・ダミアン	15	記載なし
サンタ・アナ	29	41
ロレート	44	80
サン・イグナシオ・ジャベビリ (ミニ)	34	65
サン・ホセ	50	33
コルプス	22	38
ヘスス	当時存在せず	28
サンティアゴ	記載なし	22
ヌエストラ・セニョーラ・デ・フェ	記載なし	19
トリニダ	当時存在せず	15
合計	581	368

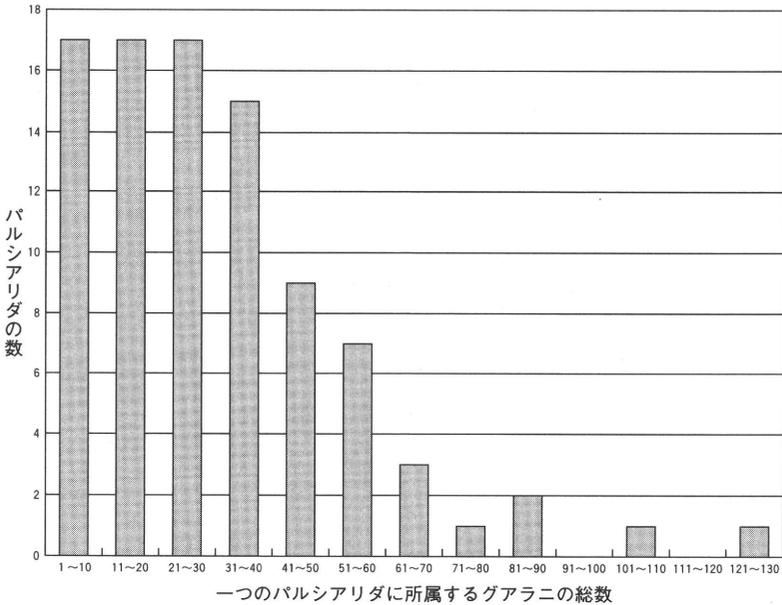
出典 Pastells 1915: 512-515; Pastells y Mateos 1946: 10-31.

一つの布教区に存在したカシーケの数は、現存する布教区住民名簿をもとに概算できる(表1を参照)。まずは17世紀中葉の数字である。1657年9月から10月にかけて、時のパラグアイ総督ファン・ブラスケス・デ・バルベルデは、当時監督下にあった19の布教区それぞれを担当するイエズス会

士より、カシーケの人数について報告を受けた。これによると、当時の布教区全体のカシーケの総数は581人、布教区一つあたりにおよそ30人がいた計算になる¹³⁾。次いで1715年8月から10月にかけて、パラグアイ総督ファン・グレゴリオ・バサン・デ・ペドラーサが、納税者の数を特定するために、各地の布教区を巡察したことがあった。残念ながら1715年作成の住民名簿は、当時存続した30近い布教区の中でも、10布教区のカシーケの数しか言及していない。このため布教区30の全体像を提示することはできないが、この10布教区のカシーケの総数は368人、一布教区あたりに平均36人いたことはわかる¹⁴⁾。しかし実際には、カシーケの数は、布教区の規模をはじめその他の諸要因が関連して大きく異なっていた。例えば1657年の例では、イタブア布教区が55人のカシーケを有する一方で、マルティレス布教区にはわずか15人が暮らすのみだった。同様に1715年においても、ロレート布教区のカシーケは80人にも達する一方で、トリニダ布教区のカシーケは15人に過ぎない。従って総体的にみて、布教区ごとのカシーケの数には、大きなばらつきがあったと推察される。

17・18世紀を通じて布教区ごとにカシーケの数が大きく異なっていたことは前述のとおりだが、同様の差異は、一人のカシーケが率いる配下の人数にも認められる。これに関しては、「はじめに」で触れた1715年のパラグアイ総督主導の布教区巡察の際、同年9月21日付で作成されたサン・イグナシオ・ミニ布教区の住民名簿が、興味深いデータを提示してくれる¹⁵⁾。この名簿には同布教区在住のグアラニの氏名、年齢、親族関係、社会的地位などが細かく記載されている。これらのデータの記載の仕方は、まずカシーケ・プリンシパル¹⁶⁾ (cacique principal) と表記される人物の名が記され、次に彼の妻子の名前と年齢が記される。さらにカシーケが率いる人々のデータが世帯ごとに記され、すべての列挙が終わると、別のカシーケの氏名が記載される。以下同様の手順で世帯ごとの構成が続いていく。さらにこの名簿では、それぞれのカシーケが管轄する人々は、パルシアリダという単位で一括されている。なおこの時期のサン・イグナシオ・ミニ布教区

図1 サン・イグナシオ・ミニ布教区のバルシアリダ (1715)



出典 註15の未刊史料と同じ。

に所属するカシーケは全部で90人¹⁷⁾、布教区の総人口は2803人、総世帯数は708で、一世帯あたりの平均人数は4人であった。

この住民名簿をもとに作成したのが図1である。これは一つのバルシアリダに所属するグアラニの総数を示したものである。これをみると、1715年9月のサン・イグナシオ・ミニ布教区においては、全90人のカシーケの内で、50人近くが最大40人程度を率いており、41人から60人ほどを率いたのは15人程度だったことがわかる。中には100人以上からなるバルシアリダを統率するカシーケも二人いたようだが、これは例外的なケースとみてよからう。つまりこのグラフから判断して、一つの布教区は、規模の異なる複数のバルシアリダの集合体だったことがわかる。

なお前述のとおり、そもそもカシーケとは、布教区に入る前は一つの家に属する大家族を率いたテイイルであり、布教区に入った後は、バル

シアリダの代表として、同じく複数の家族を統率した。つまりこのことから、バルシアリダは、布教区編入以前の拡大家族テイイに相当する親族集団と考えられる。

2 カシーケという身分・地位・待遇

これまでの考察により、イエズス会士たちは、カシーケを筆頭としたバルシアリダをもとに、布教区を運営していたことが明らかになった。それでは布教区において、カシーケには、そもそもどのような社会的地位や権力が与えられていたのか。これについては、17世紀後半から18世紀後半にかけて活動したイエズス会士たちの手記が多く情報を提供してくれる。

カシーケとは、スペイン王権により認められた貴族であり、その証しとしてドン (Don) の称号が授与された人々である。彼らは布教区内で主に手工業ないしは職人的仕事に従事した。具体的には鍛冶、大工、彫刻、銀細工、機織り、作画、楽器製造などである。さらにカシーケは、政治組織カビルドや、次のIIで論じる軍事組織の役職に優先的に就くことが多かった。これらの役職は、布教区内の要職に相当した (Cardiel 1918: 473-474; 1949: 140, Sepp 1974: 183)。

カシーケの息子たちは、布教区内に設けられた学校で優先的に教育を受け、読み書きや音楽などを習った。このような教育の目的は、将来的に布教区の運営を担う人材の育成にあったとされ、教育を受けた人々は、布教区内で指導層を形成した (Cardiel 1913: 557; Peramás 1946: 72)。

このように、ドンの称号を授与されたカシーケは、手工業的職種に従事し、その息子は学校に通うなど、それ以外のグアラニとは異なる待遇や特権を享受していた¹⁸⁾。そしてイエズス会士の多くは、このような状況はどの布教区にもみられる一般的なこととして、一連の著作を執筆した。彼らのこうした著作にもとづけば、例えば軍事組織について考えた場合、その役職の多くは、ドンの称号を有するカシーケにより占められていたと推察される。しかし次に取り上げる1760年代初頭に作成された先住民徴兵簿を分

析すると、この推察は覆るのである。

II 先住民軍事組織の専門化

1 軍事組織専門化の発端

イエズス会士との接触前のグアラニ社会においても軍事的指導者が存在し、対立する他の民族集団との戦いの際には、彼らが配下の者を統率していたとされる (Roulet 1993: 59-60, 81-82)。これを史料的に裏づけるとすれば、時代はやや下るが、イエズス会士ホセ・ゲバラが18世紀後半頃に綴ったラプラタ地域の地誌・歴史があげられる。その中で彼は、グアラニが布教区で暮らす前から行っていた指揮官選出のやり方を記している。戦いの前、ある首長の家に、その他の首長たちが集って話し合いがなされ、一人の指揮官 (jefe) が選出される。しかし首長の多くは、名誉を求めて指揮官に就きたいと主張する。このため、その選定にはいつも議論が絶えなかった (Guevara 1969: 525-526)。また布教区を設立して間もない17世紀初頭のこと、イエズス会士マルシエル・デ・ロレンサーナは、あるグアラニの集団を武力で制圧して布教区に組み込む計画を練っていた。その際、軍事組織の総指揮官の地位に相当すると思われるカピタン・ヘネラル (capitán general) や、これの補佐役にカシーケを就けて、彼らに配下の人々を指揮させたことがあった。しかし軍才に長けたカシーケたちは「自分こそが役職者に相応しい」と互いに一歩も譲らず、役職者の選定は容易ではなかった (Lozano 1755: 202-205)。

以上の記述から、イエズス会士との接触前のグアラニ社会では、戦闘の際に複数の首長たちが集って一人の人物を指揮官に選出し、おそらくこの人物は、首長たちの中でも戦闘能力に特に秀でた者であったことがわかる。また布教区設立当初の17世紀初頭においても、在来のやり方がほぼそのまま受け継がれ、カシーケが軍事役職者に任命されて配下の人々を指揮したことがわかる。

カシーケが軍事役職に就く傾向は、17世紀初頭のみならず、それ以後に

表2 スペイン人総督より軍事役職を授与されたグアラニの氏名

グアラニの氏名	地位	軍事役職	役職授与年月日
アジャオ	カシーケ	カピタン	1629年 8 月 1 日
ドン・アントン・アランバレ	カシーケ	マエストレ・デ・カンポ	1639年 2 月 1 日
ドン・ニコラス・ネンギル	カシーケ	カピタン・インソリディウム	1640年12月18日
ドン・フランシスコ・バイロバ	カシーケ	カピタン	1640年12月18日
アントニオ・グアラシカ	カシーケ	カピタン	1640年12月18日
ドン・テオドロ・イアンパタイ	カシーケ	カピタン	1640年12月18日
ドン・フランシスコ・アビエ	記載なし	カピタン	1640年12月18日
ドン・ロケ・ギラカス	カシーケ	カピタン・デ・ゲーラ	1640年12月18日

出典 註19の刊行史料と同じ。

も認められる(表2を参照)。1629年、1639年、1640年の三度にわたり、パラグアイ、リオデラプラタ両総督の名のもと、当時存在した一部の布教区に住むグアラニに、カピタン (capitán)、カピタン・デ・ゲーラ (capitán de guerra)、カピタン・インソリディウム (capitán insolidium)、マエストレ・デ・カンポ (maestre de campo) などの軍事役職が与えられた。これら役職の職務や上下関係はわからない。しかし役職に任じられた8人の内7人がカシーケであり、また6人がドンの称号を持っていたことはわかっている¹⁹⁾。

1629年から40年にかけてのグアラニへの軍事役職の授与は、彼ら自らが武装して自衛することを、スペイン人総督が認可したことの表れとみなせる。この頃、ポルトガル人がスペイン領に侵入しては布教区を襲撃、生け捕りにしたグアラニをブラジル北東部のサトウキビ農園に売りさばくという事件が多発していた (Carvallo 1980: 36-40; Mörner 1953: 87, 103)。こうした状況に緊急に対応するために、イエズス会士は、スペイン人総督の認可の下、ドンの称号を有するカシーケに軍事役職を担当させて、彼らに配下の人々を指揮させたのである²⁰⁾。

しかし1641年以降、軍事組織はその性質と意味合いを徐々に変えていく。

同年3月、ラプラタ地域を流れるウルグアイ川の支流ムボロレ川流域にて、それまでの自衛の取り組みが功を奏し、イエズス会士とグアラニは、ポルトガル人率いる奴隷狩り部隊に劇的な勝利を飾った。後世ムボロレの戦いとして知られるこの戦闘でのグアラニの勝利は、時のスペイン国王フェリーペ4世とその側近たちの関心を強く惹いた。戦いの翌年の1642年11月21日付の勅令にて、国王は、兵力の不足を補うために、銃器武装させたグアラニを領土境界線付近に配置して、スペイン領の防衛を担わせる計画の重要性と妥当性を公言した²¹⁾。以後グアラニが暮らす布教区は、しばしば砦 (presidio)、防護壁 (antemural)、城壁 (muralla) と例えられ、スペイン領防衛の要となった。イエズス会士自身も、国王のこのような意図を察して、グアラニをラプラタ地域各地に積極的に派遣した。これと引き換えに、国王は、布教区の運営を支援する内容の勅令を次々と公にした²²⁾。

スペイン帝国にとってのラプラタ地域のイエズス会布教区の位置づけが1641年以降に大きく変わったことの余波は、イエズス会士による軍事関連の記述に明確に表れている。例えば同世紀後半から18世紀にかけての状況として、アントニオ・セップは、どの布教区にも4つの部隊 (regimiento) が存在し、各部隊は、カピタン、第一サルヘント (sargento primero)、カボ (cabo)、槍兵、矛槍兵、マスキット銃兵、投げ縄手、弓手などから構成されており、また楯やこん棒で武装する者や、偵察兵も存在したと述べている (Sepp 1974: 187-188)。また18世紀中葉から後半にかけての布教区担当者ホセ・カルディエルは、各布教区には部隊 (compañía) が8つ存在し、マエストレ・デ・カンボをはじめ、様々な軍事役職が設けられていたと記した²³⁾ (Cardiel 1913: 581)。

以上のように、軍事組織の本格的な編成は、スペイン国王が布教区を利用した領土防衛計画を立案した1641年以降に進行していったと考えられる。しかしセップもカルディエルも、組織の具体的な形態については詳しく語っていない。また各布教区の軍事組織についても、「部隊に関しては布教区の規模に応じて違いがあった」という趣旨の一言をカルディエルが残

すのみで (Cardiel: 1984: 87)、詳細は依然としてわからない。しかし次に考察する徴兵簿の分析により、これらの疑問が解決されることに加え、ムボロレの戦い以前にはカシーケが配下の人々を指揮することで機能していた軍事組織が、それ以降に徐々に変容していった可能性がみえてくる。

2 徴兵簿が示唆する軍事組織の専門化

1761年3月21日、リオデラプラタ総督ペドロ・デ・セバージョスは、当時存在した30すべての布教区に対し、一定数の兵員や軍事物資の供出を命じた。これに対して24の布教区が、同年4月から5月上旬にかけて、派遣可能な兵員および部隊数、準備可能な銃器、弓、槍、馬の数を報告した²⁴⁾。

この命令は、ラプラタ河口のコロニア・デル・サクラメント (Colonia del Sacramento [以後「コロニア」と表記]) の4回目の占拠にグアラニを動員する目的で出されたと考えられる (Carbonell 1992: 463)。コロニアとは、現在のウルグアイの首都モンテビデオ西部の町である。元は、ラプラタ河口でのイギリス、フランス、オランダ商人との交易に本格的に参入しようとしたポルトガル人が、1680年1月に建設した軍事基地である。しかし当時スペインは、コロニアが建設された一帯は自国の領土と主張しており、ポルトガル人の行為を領土侵犯とみなした。このためスペインは、1680年、1704-05年、1735-36年、1762-63年の4回にわたり、コロニアの占拠を布教区のグアラニに命じた。占拠はグアラニの活躍により、4回の内3回成功したとされている。しかし、占拠後にスペインと他のヨーロッパ諸国との間で行われた外交交渉の結果、コロニアは度々ポルトガルに返還された²⁵⁾。

以上がコロニアの歴史的概要だが、本稿が論じたいのは、その4回目の占拠実施に際して、各布教区が派遣可能として徴兵簿に記載した兵員と部隊の数である (表3を参照)。

一部の布教区に関しては、兵員数もしくは部隊数のいずれかが欠落しているために、正確に算出できない。しかし双方が明確に記載され、かつ判読可能な布教区を例に平均値を出してみると、若干の誤差が生じるケース

表3 布教区ごとの兵員数と部隊数 (1761)

布教区の名称	兵員数(A)	部隊数(B)	平均値(A÷B)
サンタ・アナ	1050	21	50
サン・ミゲール	490	記載なし	
ロレート	854	15	56.9
サン・ホセ	310	4	77.5
コンセプション	記載なし	8	
サン・フアン	29	記載なし	
サン・カルロス	記載なし	6	
サント・トメ	400	8	50
サン・ボルハ	記載なし	5	
サン・イグナシオ・ミニ	記載なし	5	
サンタ・ロサ	642	12	53.5
サン・ルイス	30	記載なし	
サン・ロレンソ	32	記載なし	
サント・アンヘル	記載なし	1	
ジャベジュ	300	6	50
サン・ニコラス	87	1.5	58
サン・ハビエール	100	2	50
アポストレス	記載なし	6	
サン・コスメ・イ・ダミアン	100	記載なし	
トリニダ	読み取り不可	記載なし	
コルプス	700	14	50
サンティアゴ	100	記載なし	
ヘスス	記載なし	読み取り不可	
カンデラリア	600	12	50

出典 註24の未刊史料と同じ。

もあるが、基本的に一部隊は、50名の兵員から構成されていたことがわかる。

史料の制約から平均値を算出できない布教区に関しても、この「一部隊=50名」は、基本原則だったと考えられる。例えばコンセプション布教区

に関しては、兵員数の記載はないが、8部隊が存在したとある。しかしこの8部隊は、それぞれ50人から構成されていたとある。また同布教区には、サン・ミゲール布教区出身者52名からなる部隊が存在したという記述があり、これは一部隊 (una compañía) と書かれている。さらにサン・カルロス布教区にも、別のサン・ルイス布教区出身者で構成される部隊が4つあり、それぞれ50名構成とある。

このような形態の部隊は、前述の親族集団パルシアリダとは異なる原理を有していたと考えられる。1715年に作成された住民名簿の分析からも明らか通り、個々のパルシアリダの人数は10名以下から100名以上までと大きく異なっていた。従って「一部隊=50名」という原則を守ろうとすれば、「パルシアリダ A とパルシアリダ B を組み合わせて一部隊を形成」ということは到底できない。つまり軍事組織は、パルシアリダとは異なる原理をもとに編成されていたのである。

次に部隊の内部構成を記した三つの徴兵簿をみてみよう (表4を参照)。残念ながら執筆年や布教区の名称が記載されていないため、徴兵簿そのものに関して詳しいことはわからない。しかし字体や紙の質からして、これらは18世紀後半に書かれたと推定される²⁶⁾。いずれの徴兵簿も、タイトルとして各部隊を統率する指揮官役のグアラニの氏名が記載され、以下、部隊に属する人々の氏名が列挙されている。最初に軍事役職者が登場し、次に兵士 (soldado) という項目において一般兵士の名が連なる。軍事役職者もしくは一般兵士の人数に数名程度の増減が認められるが、各部隊とも一律50名構成であることは、三つの徴兵簿すべてに共通している。

ここで最も注目すべきは、いずれの徴兵簿でも、10数名程度の軍事役職者の内でドンの称号を持つ者はわずか数名であり、役職の大半は、ドンではないグアラニにより占められている点である。またいずれの部隊でも、ドンである者が、そうではない者と同等として、一般兵士の項目に含まれる点も見逃してはならない。前述のとおり、1629年から40年にかけての軍事役職は、ドンを持つカシーケにより占められていた。もし状況が変わら

表4 一部隊の内部構成

部隊統率者氏名	軍事役職者 (ドン保持者)	軍事役職者 (ドン無保持者)	一般兵士 (ドン保持者)	一般兵士 (ドン無保持者)	合計
ドン・ミゲール・ アラティオ	1	10	4	35	50
ドン・フランシスコ・ アジャリ	2	11	4	33	50
ドン・ミゲール・ チャレ	3	8	5	34	50

出典 註26の未刊史料と同じ。

なければ、この三つの徴兵簿で言及される軍事役職者の氏名の前には、敬称としてドンの称号がついていたはずである。にもかかわらず、大半の役職者はドンではない。

このことは、平時の親族集団パルシアリダと戦時の軍事組織が、18世紀には異なる構造を有していたことの表れなのだろう。前述のとおり、布教区の日常生活において、パルシアリダはカシーケにより統率され、畑仕事や建物の建設など、多くの人手を要する作業が行われていた。また軍事組織に関しては、1629年から40年にかけてのスペイン人総督による軍事役職の授与の例でみたとおり、役職は基本的にドンの称号を持つカシーケに与えられ、配下の人々が彼の指揮下に入った。ところが先に取り上げた三つの徴兵簿をみると、18世紀においては全く異なる状況が生まれていた。つまりこの時期、パルシアリダと軍事組織は別個の組織だったと推論できる。

この点に関して、住民名簿（1715年執筆）と徴兵簿（1761年執筆）の執筆年にはおよそ50年のズレがあり、史料のうえでの制約があるのは否めない。しかし「はじめに」で紹介したススニックは、イエズス会士追放以後（1767年以後）も、パルシアリダが布教区内で存続していたこと、パルシアリダの統率者は依然としてカシーケであったこと、そして個々のパルシアリダの構成人数は18世紀初頭と同様にその規模に応じて大きく異なっていたことを史料的に裏づけている（Susnik 1966: 107-172）。このことは、パ

ルシアリダが18世紀後半においても親族集団としての基本的性格を変えておらず、「一部隊=50人」として編成される軍事組織とは異なる原理を持ち続けたことを示す。さらに、軍事組織の役職の大半がカシーケでない人物により占められていたという前述の三つの徴兵簿の分析結果を踏まえると、軍事組織はある時期以降、パルシアリダとは異なり、カシーケを必ずしも筆頭としない別の組織として自立し、軍事機能を専門的に担うようになったと考えられるのである。

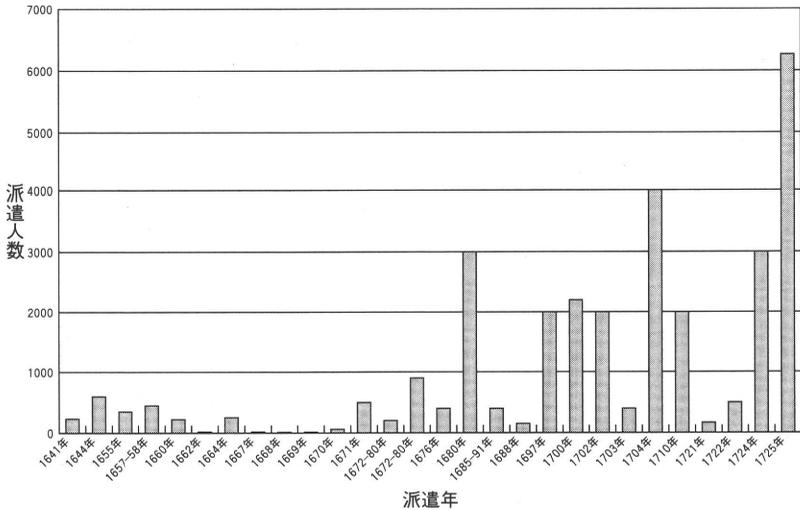
3 軍事組織専門化の諸要因

軍事組織の専門化を促した要因に関しては、次の指摘が可能である。第一に、スペイン人総督の命を受けてのグアラニの頻繁な出動である。イエズス会士フランシスコ・ブルヘスが1702年頃にスペイン国王に宛てたパラグアイ管区内の布教区の現状に関する報告書、また彼の同僚ヘロニモ・エランが18世紀前半に同じく国王に宛てた管区内のイエズス会の活動状況の記録を参照すると、1641年以前のグアラニの動員は1回のみであったのが、同年から1725年にかけては計28回もの動員があったことがわかる。つまり1641年以降のグアラニは、ポルトガル人のスペイン領への侵入抑止や、好戦的な先住民の平定に頻繁に駆り出されたのである²⁷⁾。

第二に指摘できるのは、個々の軍務の大規模化である。図2は、ラプラタ地域各地へのグアラニの派遣人数と派遣年を記したもののだが、1680年に3000人のグアラニが派遣され、以後1725年まで数千人規模の派遣が断続的に続いたことがわかる。その一方で、1680年以前の派遣は、常に1000人に満たなかった。

1680年を境にして、それまでの数百人単位の派遣人数が、一気に数千人規模に膨れ上がるというこの増加には、ラプラタ河口のコロニアの占拠が関与していると考えられる。前述のとおり、スペインにとってコロニアの存在を放置することは、ポルトガル人による領土侵犯を是認することにつながった。そしてこれに我慢ならないスペインが、1680年以降およそ80年、

図2 ラプラタ地域各地へのグアラニの派遣人数



出典 註27の未刊史料と同じ。

4回にわたり、コロニア占拠命令をグアラニに下したのは前述のとおりである。なおいずれの回でも、グアラニの動員数は数千規模であったことを付言しておきたい (Hernández 1913 Vol. 2: 49-62)。

以上のようなグアラニの頻繁な出動や、個々の派遣の大規模化は、スペイン国王ならびにラプラタ地域のスペイン人総督の要請にイエズス会士が応じた結果であった。こうした状況下、イエズス会士は1641年以降パルシアリダとは別個の専門的な軍事組織の整備を進め、それがほぼ完成の域に達したのが1680年以前と推論できるだろう。

最後に、イエズス会布教区における専門的軍事組織の成立プロセスは、同時代の軍事状況全般とあわせて検討すべき課題であることを指摘したい。例えばスペイン領アメリカ全域の軍事組織を包括的に扱ったファン・マルチェナ・フェルナンデスの研究は、歩兵、砲兵、騎兵などの部隊構造、カピタンやサルヘント・マジョールなど個々の軍職の内容と上下関係、軍事役職者の地域的・社会的出自や年齢、新兵募集の手順などを論じている

(Marchena Fernández 1983)。彼の研究は、依然として不明瞭である布教区の先住民軍事組織の個々の役職の位置づけや、職務内容の解明に大いに役立つに違いない。またテルシオ (tercio) と呼ばれる歩兵連隊を対象に、16世紀スペインの軍隊編成に活用された数学的原理を論じたレネ・カトルファージュの研究は、本稿で論じた「一部隊=50人」という原理が布教区内に導入された背景を知るうえで示唆的である (Quatrefages 1979)。さらに近世オランダを対象に既存の社会階層を反映しない軍事組織の誕生を論じたモーリー・D・フェルドの論文は、親族集団パルシアリダとは別の専門的軍事組織がイエズス会布教区で誕生した経緯の解明に役立つだろう (Feld 1975)。

おわりに

これまでの議論をまとめると次のようになる。ラプラタ地域で本格的な布教活動を始めた17世紀初頭、イエズス会士は布教区を運営する際に先住民共同体の統率者の権威を活用した。彼らは布教区内でカシーケと呼ばれ、親族集団パルシアリダの監督者となった。パルシアリダは建物の建設や畑仕事の際にカシーケにより監督され、その規模はパルシアリダごとに大きく異なっていた。またカシーケにはスペイン伝来のドンの称号が付与され、大工や画家などの手工業的な職種や社会的地位の高い役職に就いた。

本稿の後半で考察した軍事役職も布教区内の要職の一つである。布教区発足間もない17世紀前半はカシーケがこれに就いていた。しかし1761年作成の徴兵簿を分析すると、どの布教区でも「一部隊=50人」という数字がほぼ厳密に守られていた。この事実は、パルシアリダとは異なる原理を有する専門的軍事組織の成立を示唆する。また一部隊の内部構成を記した18世紀後半の執筆と思われる徴兵簿の分析は、ドンを持たないグアラニが同時期の軍事役職の大半を占めたことを明らかにした。

軍事組織の専門化は、1641年以降のスペイン帝国内での布教区の位置づけの変化に起因すると考えられる。同年のポルトガル人との戦いでグア

ラニの勝利は、布教区を利用した領土防衛計画をスペイン国王に発案させる契機となり、布教区は王権の保護下におかれ、グアラニには軍務が頻繁に課せられた。また1680年のコロニアの占拠以後は個々の軍務の規模も大きくなった。つまり軍事組織の専門化は、おそらく1641年から80年にかけて徐々に進行したと推察される。

そしてこれはIIの3の最後で触れたが、本稿の主目的である布教区内の社会組織の考察の過程でみえてきた軍事組織の専門化は、スペイン領アメリカ全域の軍制システムの仕組み、スペインにおける軍事組織の内部構造、スペイン以外のヨーロッパ諸国における近代的軍事制度誕生の経緯など、より大きな歴史的コンテクストに位置づけつつ、慎重に議論せねばならないテーマである。

これまで論じたとおり、イエズス会布教区 of 社会組織の具体的詳細を明らかにした先行研究は皆無に等しい。またパルシアリダや軍事組織に関して言えば、その数、規模、機能など基本的なデータを提示した研究もほとんどなく、さらに両者を比較検討した論考も、筆者が知る限り見たことはない。本稿では史料の制約によりパルシアリダと軍事組織に焦点を絞ったが、筆者が仮説的に提示した両組織の通時的变化やダイナミズムは、本稿で検討できなかったカビルドやCongregaciónに関する点でも起こりえたのではないか。今後は本稿の議論を踏まえ、またさらなる史料分析を通じて、布教区内の社会組織の全体像を究明したい。

*本稿本文の執筆にあたり、国立民族学博物館の齋藤晃准教授、またスペイン語要旨の執筆にあたり、上智大学のホアン・アイダル (Juan Haidar) 准教授をはじめ、他数名の方々より有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。なお本稿は平成16年度笹川科学研究助成金、また平成20・21年度文部科学省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。

註

- 1) 本稿におけるグアラニとは、その起源を南米大陸のアマゾン川南岸に持ち、

スペイン人征服者との接触間もない16世紀前半には、現在のパラグアイ東部、ブラジル南部、アルゼンチン北東部で暮らしていたアメリカ先住民の集団を指す。また言語的にはトゥピ・グアラニ語 (tupí-guaraní) の一派であるグアラニ語を話す。

- 2) イエズス会は管区 (Provincia) という区域を設けて世界各地で布教活動を行った。スペイン統治期に創設されたパラグアイ管区とは、時代ごとに若干の変更があったが、概ね現在のパラグアイ、アルゼンチン、ブラジル南部、ウルグアイを指した。
- 3) 世界各地の布教地で起きた出来事をまとめた年次報告書。通常は叙述形式で執筆され、管区長名でローマ在住の総長に年に一度送られた。
- 4) 代表的な研究成果は次の通り (Caraman 1975; Palacios y Zoffoli 1991; Gálvez 1995; Reiter 1995; Abou 1996; Armani 1996)。
- 5) パルシアリダに相当する対象をスペイン語表記する際、イエズス会士追放以後 (1767年以後) に作成された布教区住民名簿では、往々にしてカシカズゴ (cacicazgo) という言葉が用いられる。このためスニックは、著作の中ではパルシアリダを一貫して「cacicazgo」と表記している。しかし追放以前の名簿では「parcialidad」という言葉が基本的に用いられる。このような差異が生じた原因はわからない。
- 6) スペイン統治期、現在のパラグアイの首都アスンシオンに在住したスペイン人総督はパラグアイ総督と呼ばれた。他方、現在のアルゼンチンの首都ブエノスアイレスに在住したスペイン人総督はリオデラプラタ総督と呼ばれた。18世紀前半に総数30に達したイエズス会布教区は、それぞれの位置により二人の総督のいずれかの監督下におかれた。しかしアスンシオン周辺で勃発したコムネーロスの乱 (1721-35) の平定以後は、すべての布教区はリオデラプラタ総督の監督下におかれた。
- 7) “Informe de um jesuíta anônimo sobre as cidades do Paraguai e do Guairá espanhóis, índios e mestiços, dezembro, 1620,” Cortesão 1951: 166-167; “Letras annuas De la Provincia de Paraguay de los años de 1626. y 27. de los collegios y misiones de la Comp. a de IHS,” Leonhardt y Ravignani 1929: 362-363.
- 8) 後述するが、17世紀後半から18世紀にかけて、メモリアル (memorial) という一連の命令文書が、パラグアイ管区長から管区内の同僚へ送られた。メモリアルには、グアラニの住居を頑丈な石造りに建て直すようにとの指示が頻繁にあった。おそらくこの過程で、本文で言及したグアラニの在来の居住形態は、次第に廃れていったと考えられる。
- 9) 人類学者たちの研究によれば、先スペイン期のグアラニの社会組織に関しては、テイイの他に、これが3つから8つほど合わさった第二段階のテコア

(teko'a)、また複数のテコアが結集した第三段階のグアラ (guará) と呼ばれる組織が存在し、それぞれにはテイイルと異なる上位の指導者がいたとされる (Necker 1990: 27-30; Roulet 1992: 169-171; Susnik y Chase-Sardi 1995: 35-41)。しかしイエズス会士の記録の中では、テコアやグアラに相当する社会組織への言及はほとんど出てこない。従って本稿ではテイイより上位の組織は扱わない。

- 10) “Información en favor de los caciques de la nación guaraní en que suplica haber habido siempre caciques,” AGN IX 6-9-3, f. 612v. 史料原文の indio principal がカシーケを指す可能性は極めて高いが、断定する根拠はない。このため本文では「インディオ・プリンシパル」とカタカナで表記した。
- 11) “Memorial del P. Provincial Luis de la Roca en la visita de 28 de junio de 1714 para esta doctrina de San Miguel,” AGN IX 6-9-5, f. 512v.
- 12) “Memorial del P. Provincial Luis de la Roca en esta visita de 1 de julio de 1714 para esta doctrina de San Lorenzo,” AGN IX 6-9-5, f. 513v.
- 13) “Breve suma de los caciques, que lo eran desde su gentilidad, contenidos en las peticiones y memorias que dieron los padres doctrineros al Visitador D. Juan Blázquez de Varverde,” 3 de septiembre de 1657 y 6 de octubre de 1657, Pastells 1915: 512-515.
- 14) “Autos originales del Padrón de indios sueltos del pueblo de San Ignacio, et. al.,” agosto-octubre de 1715, Pastells y Mateos 1946: 10-31.
- 15) “Padrón del Pueblo de San Ignacio del Yabebirí (i. e., San Ignacio Miní),” San Ignacio Miní, 21 de septiembre de 1715, AGN IX 6-9-5, ff. 572-594.
- 16) 史料のコンテクストから判断して、cacique principal はいわゆる「カシーケ」を意味すると考えられる。史料執筆者が「principal」という言葉を加えた理由はわからない。
- 17) 表1でみたとおり、パラグアイ総督バサン・デ・ペドラーサが1715年に実施した布教区巡察時に作成されたサン・イグナシオ・ミニ布教区の住民名簿には、カシーケの数は65人とある。しかしアルゼンチンのAGN所蔵の同布教区の同年の住民名簿には、90名のカシーケが記載されている。このような差異が生じた原因はわからない。
- 18) 齋藤晃によれば、ボリビア北東部のモホス地方のイエズス会布教区においては、このような特権的な地位におかれた先住民はドメスティコ (doméstico) と呼ばれた (齋藤2009: 133-136)。
- 19) “Título de capitanes y de otros ministros de justicia y guerra que los gobernadores han dado a los indios del Paraná y Uruguay,” Salinas 2006: 270-276. 本稿ではマリア・ラウラ・サリーナスがチリの国立文書館 (Archivo Na-

- cional de Chile) 所蔵の同史料を簡潔な紹介文を添えて出版した転写版を用いた。2009年8月に同図書館で調査を行った際、マイクロ・フィルム化された同史料は十数年前に紛失したことが判明した。
- 20) 同様の形態は、ボリビア北東部のモホス地方で17世紀後半より発足したイエズス会布教区でも導入されていた(齋藤2003)。
- 21) “Cédula Real,” Zaragoza, 21 de noviembre de 1642, Hernández 1913 Vol. 1: 525-526.
- 22) “Cédula Real,” 1643, 1647, 1649, 1661, 1679, Hernández 1913 Vol. 1: 513-524.
- 23) 「部隊」を示す言葉として、セップの史料では「regimiento」、他方カルディエルの史料では「compañía」とある。これは、おそらく原典史料の執筆言語の違いによると思われる。パラグアイの歴史に関連する諸史料の執筆背景、原典・翻訳史料の出版状況、評価のされ方などを体系的にまとめたエフライム・カルドーンによれば、前者はセップが17世紀後半から18世紀前半にかけて布教区で活動した時期にドイツ語で記した史料である(Cardozo 1979: 268-269)。そしてこれがスペイン語に訳されたのは1974年である。つまり「regimiento」は訳語である。これに対して「compañía」は、スペイン生まれのカルディエルが母語で綴った言葉である。
- 24) “Carta del Padre Enis y notas oficiales de los corregidores de las Misiones sobre alistamiento de sus milicias y reseña de sus compañías, dirigidas a D. Pedro de Cevallos, con una instrucción sobre la organización militar por distritos, 1761,” MM, Armario B, Cajón 18, Núm. de Piezas 27, Núm. de Orden 32.
- 25) コロニア占拠をめぐる歴史的経緯については次を参照。Ferrand de Almeida 1973.
- 26) “Pie de lista de la compañía del capitán D. Miguel Aratio”; “Pie de lista de la compañía del capitán D. Francisco Ayarí”; “Pie de lista de la compañía del capitán D. Miguel Chare,” AGN IX 7-1-1, ff. 151-156. このIX 7-1-1には執筆年が特定できないイエズス会布教区関連の史料が収められている。
- 27) “Memorial del P. Francisco Burgés al Rey Nuestro Señor en su Real y Supremo Consejo de las Indias sobre las noticias de las Misiones de los indios llamados chiquitos, y del estado que hoy tienen estas y las de los Ríos Paraná, y Uruguay que están a cargo de los padres de la Compañía de Jesús, de la Provincia del Paraguay, [1702?],” RAH, Sección Jesuitas 9/3629, ff. 10 v-12r; “Exposición al Rey del P. Jerónimo Herrán sobre las alteraciones y persecución de los jesuitas del Paraguay,” primer tercio del siglo XVIII,

RAH, Sección Jesuitas 9/3714, ff. 4r-5v.

参考文献

1 未刊史料

Archivo General de la Nación (AGN), Buenos Aires, Argentina.

Museo Mitre (MM), Buenos Aires, Argentina.

Real Academia de la Historia (RAH), Madrid, España.

2 既刊史料

Cardiel, José. 1913. "Breve Relación de las Misiones del Paraguay," Pablo Hernández, *Organización social de las doctrinas guaraníes de la Compañía de Jesús*, Vol. 2, (Barcelona: Gustavo Gili), pp. 514-614.

———. 1918. "Costumbres de los guaraníes," Domingo Muriel, *Historia del Paraguay desde 1747 hasta 1767: obra latina del P. Domingo Muriel de la Compañía de Jesús, traducida al castellano por el P. Pablo Hernández de la misma Compañía*, (Madrid: Librería General Victoriano Suárez), pp. 463-546.

———. 1949. "Carta y relación de las Misiones de la Provincia del Paraguay (1747)," Guillermo Furlong (ed.). *José Cardiel, S. J. y su carta-relación (1747)*, (Buenos Aires: Librería del Plata), pp. 115-213.

———. 1984. *Compendio de la historia del Paraguay (1780)*, (Buenos Aires: Fundación para la Educación, la Ciencia y la Cultura).

Cortêsão, Jaime (ed.). 1951. Jesuítas e bandeirantes no Guairá, (1549-1640), (*Manuscritos da coleção de Angelis*, Vol. 1), (Rio de Janeiro: Biblioteca Nacional, et al.).

Guevara, José. 1969. "Historia del Paraguay, Río de la Plata y Tucumán," Pedro de Angelis (ed.). *Colección de obras y documentos relativos a la historia antigua y moderna de las Provincias del Río de la Plata*, Vol. 1, (Buenos Aires: Imprenta del Estado) pp. 491-826.

Leonhardt, Carlos y Emilio Ravignani (eds.). 1929. *Cartas Anuas de la Provincia del Paraguay, Chile y Tucumán, de la Compañía de Jesús, 1615-1637*, (*Documentos para la historia argentina*, Vol. 20), (Buenos Aires: Talleres s. a. Casa Jacobo Peuser Ltda.).

Lozano, Pedro. 1755. *Historia de la Compañía de Jesús de la Provincia del Paraguay*, Vol. 2, (Madrid: Imprenta de la viuda de Manuel Fernández y del Supremo Consejo de la Inquisición).

Pastells, Pablo (ed.). 1915. *Historia de la Compañía de Jesús en la Provincia*

- del Paraguay (Argentina, Paraguay, Uruguay, Perú, Bolivia y Brasil) según los documentos originales del Archivo General de Indias*, Vol. 2 (1638-1668), (Madrid: Librería General de Victoriano Suárez).
- Pastells, Pablo y Francisco Mateos (eds.). 1946. *Historia de la Compañía de Jesús en la Provincia del Paraguay (Argentina, Paraguay, Uruguay, Perú, Bolivia y Brasil) según los documentos originales del Archivo General de Indias*, Vol. 6 (1715-1731), (Madrid: CSIC e ISTM).
- Peramás, José Manuel. 1946. *La república de Platón y los guaraníes*, (Buenos Aires: Emecé).
- Salinas, María Laura (ed.). 2006. "Liderazgos indígenas en las Misiones jesuíticas, títulos de capitanes concedidos a los caciques guaraníes en el siglo XVII," *Folia Histórica del Nordeste*, Núm. 16, pp. 267-276.
- Sepp, Antonio. 1974. *Jardín de flores paracuárico: edición crítica de las obras del padre Antonio Sepp, S. J., misionero en la Argentina desde 1691 hasta 1733, a cargo de Werner Hoffmann*, (Buenos Aires: EUBA).

3 研究書・論文

- 齋藤晃. 1997. 「イエズス会ミッションにおける民族の創出—植民地時代の「モホ」の社会変容—」(『民博通信』第77号) 74-96ページ。
- . 2003. 「戦争と宣教—南米イエズス会ミッションの捕食的拡張—」(『国立民族学博物館研究報告』第28号・第2巻) 223-256ページ。
- . 2009. 「スペイン領南米における先住民共和国の創設」(川村信三編『超領域交流史の試み—ザビエルに続くパイオニアたち—』上智大学出版) 111-164ページ。
- Abou, Sélim. 1996. *La "República" jesuítica de los Guaraníes (1609-1768) y su herencia*, (Buenos Aires: Manrique Zago).
- Armani, Alberto. 1996. *Ciudad de Dios y ciudad del sol: el "Estado" jesuita de los guaraníes (1609-1768)*, (México: FCE).
- Avellaneda, Mercedes. 2005. "El ejército guaraní en las reducciones jesuitas del Paraguay," *Historia Unisinos*, Vol. 9, Núm. 1, pp. 19-34.
- Avellaneda, Mercedes y Lía Quarleri. 2007. "Las milicias guaraníes en el Paraguay y Río de la Plata: alcances y limitaciones (1649-1756)," *Estudios Ibero-Americanos*, Vol. 33, Núm. 1, pp. 109-132.
- Caraman, Philip. 1975. *The Lost Paradise: An Account of the Jesuits in Paraguay, 1607-1768*, (London: Sidgwick and Jackson).
- Carbonell, Rafael. 1992. *Estrategias de desarrollo rural en los pueblos guaraníes (1609-1767)*, (Barcelona: Antoni Bosch Editor).

- Cardozo, Efraim. 1979. *Historiografía Paraguaya*, (2 ed.), (México: IPGH).
- Carvalho, Casiano Néstor. 1980. *Síntesis de historia de la Provincia de Misiones: contribución de los jesuitas a la formación histórica de Misiones*, (Posadas: Ediciones Montoya).
- Díaz de Zappia, Sandra L. 2003. "Participación indígena en el gobierno de las reducciones jesuíticas de guaraníes," *Revista de Historia del Derecho*, Vol. 31, pp. 97–129.
- Feld, Maury D. 1975. "Middle-Class Society and the Rise of Military Professionalism: The Dutch Army 1589–1609," *Armed Forces and Society*, Vol. 1, No. 4, pp. 419–442.
- Ferrand de Almeida, Luís. 1973. *A Colônia do Sacramento na época da sucessão de Espanha*, (Coimbra: FLUC).
- Furlong, Guillermo. 1962. *Misiones y sus pueblos de guaraníes*, (Buenos Aires: Ediciones Theoria).
- Gálvez, Lucía. 1995. *Guaraníes y jesuitas de la tierra sin mal al paraíso*, (Buenos Aires: Editorial Sudamericana).
- Ganson, Barbara. 2003. *The Guaraní under Spanish Rule in the Río de la Plata*, (Stanford: Stanford University Press).
- Hernández, Pablo. 1913. *Organización social de las doctrinas guaraníes de la Compañía de Jesús*, Vols. 1–2, (Barcelona: Gustavo Gili).
- Jaeger, Odilon. 1971. "A liturgia nas reduções dos guaranis," *Perspectiva teológica*, Núm. 2, 1971, pp. 203–216.
- Kern, Arno. 1982. *Missões: uma utopia política*, (Porto Alegre: Mercado Aberto).
- Marchena Fernández, Juan. 1983. *Oficiales y soldados en el ejército de América*, (Sevilla: EEHA).
- Mörner, Magnus. 1953. *The Political and Economic Activities of the Jesuits in the La Plata Region: the Hapsburg Era*, (Stockholm: LIAS).
- Necker, Louis. 1990. *Indios guaraníes y chamanes franciscanos: las primeras reducciones del Paraguay (1580–1800)*, (Asunción: CEAUAA).
- Palacios, Silvio y Ena Zoffoli. 1991. *Gloria y tragedia de las Misiones Guaraníes: historia de las reducciones jesuíticas durante los siglos XVII y XVIII en el Río de la Plata*, (Bilbao: Ediciones Mensajero).
- Quatrefages, René. 1979. *Los tercios españoles (1567–1577)*, (Madrid: FUE).
- Reiter, Frederick J. 1995. *They Built Utopia: The Jesuit Missions in Paraguay 1610–1768*, (Maryland: Scripta Humanistica).
- Roulet, Florencia. 1992. "Fragmentación política y conflictos interétnicos: las

condiciones internas de la vulnerabilidad de los guaraní ante la conquista española," *Suplemento Antropológico*, Vol.27, Núm. 1, pp.159-186.

———. 1993. *La resistencia de los guaraní del Paraguay a la conquista española (1537-1556)*, (Posadas: UNM).

Susnik, Branislava 1966. *Los trece pueblos guaraníes de las Misiones, (El indio colonial del Paraguay, Vol.2)*, (Asunción: MEAB).

Susnik, Branislava y Miguel Chase-Sardi. 1992. *Los indios del Paraguay*, (Madrid: MAPFRE, 1992).